

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	山崎 宣次
2. 審査委員	主 査：（兵庫教育大学教授） 森広 浩一郎 副主査：（兵庫教育大学准教授） 大野 裕己 委 員：（岡山大学教授） 寺澤 孝文 委 員：（兵庫教育大学教授） 森山 潤 委 員：（兵庫教育大学准教授） 永田 智子
3. 論文題目	特徴単語を用いた小学校通知表所見の記述支援に関する研究
4. 審査結果の要旨	<p>学校教育実践学専攻学校教育方法連合講座 山崎宣次 氏から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>日時：平成28年1月31日（日） 16時00分～16時50分 場所：兵庫教育大学 神戸ハーバーランドキャンパス 講義室3</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>(1) 論文の構成</p> <p>第1章 序論 第2章 使用した小学校通知表所見のデータ 第3章 特徴単語抽出のためのテキストマイニング手法の比較 第4章 所見の教員間比較による特徴単語抽出 第5章 教員が考える特徴単語との比較 第6章 特徴単語提示による所見記述支援の可能性 第7章 結論と今後の課題 参考文献</p> <p>(2) 論文の概要</p> <p>本研究は、教員がもつ観点とそれを表現する語彙は一体的と考え、児童の具体的な様子に対する観点の多様化という各教員の学びと成長に繋がることを期待しつつ、複数の小学校教員の通知表所見から抽出した特徴単語を用いて、所見記述の偏りとその解消への気づきを促す支援の実現可能性について検討することを目的としている。</p> <p>教職経験を積み何度も所見を記述していると、記述パターンが固定化して単語のレパートリが広がらず、偏りが生じやすくなる。このような所見記述の偏りとして、他の教員と比較して特に多用しがちな単語があるため、これを特徴単語と定義した。教員が自分や他の教員の特徴単語を発見することは難しく、所見記述は負担感の高い校務になっているが、その支援に関する先行研究は見られない。</p> <p>このような所見記述支援の実現可能性を検討するため、特徴単語抽出方法、所見記述支援方法</p>

という二つの課題を設定して研究をすすめた。検討にあたっては、小学校担任教員ごとの所見で使用された単語とその品詞種別に頻度を付加したもののみで構成される、個人や原文の内容を特定できない所見データを作成し、自然言語処理とテキストマイニングの技術を利用して詳細に分析している。

特徴単語抽出方法の検討では、本研究で提案する手法の基礎となる小川手法を他の代表的既存手法と比較した結果、小川手法は計算が簡明で理解しやすいだけでなく、既存手法と遜色ない特徴単語を抽出していることが確認された。この小川手法を発展させ、より独自性や共通性の高い特徴単語に絞り込む新たな手法を提案した。そこでは、文化の三角測量などの考え方を援用し、教員同士におけるより多くの比較で抽出されるものが記述支援に適した特徴単語としている。

所見記述支援方法の検討では、支援対象教員に自分や他の教員の特徴単語を考えさせ、所見での使用実態を分析している。提案手法による特徴単語と比較した結果、教員が自分の特徴単語を自身で見つけることは難しく、他の教員の特徴単語を推測することはさらに困難であることが確認された。提案手法による特徴単語を支援対象教員に提示した結果、自分の所見記述に特徴的な単語があることに気づき、その固定化を避けられる可能性があること、自分の所見で今後使ってみたい単語を見つけ、単語のレパートリを増やす可能性があることが確認された。提示の際、特徴単語に文脈情報を付加することで、さらにわかりやすくなることも確認された。

以上のことから、複数の小学校教員の通知表所見から抽出した特徴単語を用いて、所見記述の偏りとその解消への気づきを促す支援は、校務支援システムに統合してテキストマイニングを活用することにより実現可能であることが示唆された。

2. 審査経過

学校における通知表は、法的な根拠はないが全国の小・中学校で作成され、その中の所見は、数値データ等では表現できない部分の総合所見として自由記述により記載されている。所見の記述は、小学校の校務の中でも教員の負担感が高いものであるが、その支援に関する研究は見当たらない。通知表に関する先行研究は記述項目など形式に関するものがほとんどである中、本研究では、小学校の通知表所見から個人情報等を削除した上で、原文の内容を特定できないようにした単語のデータを用いている。教員が記述した文章の中でも、これまで研究対象となりにくかったものを分析・検討しており、その点でも意義深い。

所見の記述には児童の具体的な様子に対して教員が多面的な観点をもつ必要があり、その観点は所見の中で記述に使われる単語という形で可視化されているともいえる。多様な観点から児童を見ることは学校における教育活動全般にかかわる本質的なこととも考えられ、教員の成長にとって観点を増やしていくことは重要な課題であり、この点についても学び続ける教員であることが期待される。所見記述の支援による単語レベルの多様化が、直ちに教員が持つ観点多様化に結びつくとは言えないが、それに繋がる一助になればよいという立場からは、学び続ける教員の成長の支援を目指していることは理解できる。

教員が記述した所見を形態素解析で単語に分解し、その使用実態を分析している。その実態に基づいて、自身の特徴単語を教員に考えさせると、あまり使用していない単語を自分が多用していると誤認することが多く、自分だけでなく他の教員も多用する単語が多数含まれてしまうことを明らかにした。また、他の教員の特徴単語を教員に推測させると、他の教員が多用するだけでなく自分も同程度使用する単語や、実際には他の教員があまり使わない単語が含まれ、使用実態と推測がほとんど一致しないことを明らかにした。その結果として、教育に関する文書データに対するテキストマイニングの有用性を明らかにしたことは成果である。

記述支援の実験としては単語等を提示するだけの比較的単純な方法に留まっているが、自分の所見記述に特徴的な単語があることに気づくことができ、その固定化を避けられる可能性があること、自分の所見で今後使ってみたい単語を見つけ、単語のレパートリを増やす可能性があることを明らかにした。特徴単語を用いた限定的な方法であっても所見記述の支援は実現可能と示唆されることを明らかにした点は、教員に対する所見記述の学習支援に繋がる成果と考えられ、今後の発展性がある研究として高く評価された。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は 山崎宣次 氏の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。